

氏名	向井 大祐
ヨミガナ	ムカイ ダイスケ
学位の種類	博士（文化財）
学位記番号	博美第551号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	〈論文〉 肉筆浮世絵の研究 -MOA美術館蔵 重要文化財「婦女風俗十二ヶ月図」勝川春章筆の想定復元模写を通して- 〈作品〉 MOA美術館蔵 重要文化財「婦女風俗十二ヶ月図」 勝川春章筆の想定復元模写 平成26～28年度修理作品「十六羅漢像」（個人蔵） 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	宮廻正明
（論文第1副査）	東京藝術大学	客員教授	（）	有賀 祥隆
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術研究科）	荒井 経
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	木島 隆康
（副査）	東京藝術大学	非常勤講師	（）	國司 華子
（副査）	東京藝術大学	非常勤講師	（）	京都 絵美
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

本研究はMOA美術館所蔵 重要文化財「婦女風俗十二ヶ月図」勝川春章筆（以下MOA美術館本）を取り上げ、先行研究をふまえながら制作当初のMOA美術館本の想定復元模写を制作した。実際に模写制作を行うことで得られる絵画の技法、構成面からみた実技的な見地と、作品形態の復元による当初の鑑賞形態の考察を通して、肉筆浮世絵におけるMOA美術館本の位相の再検討を行った。

浮世絵は世界でも例を見ない独自の発展を遂げた芸術であるが、その芸術的評価においては大量生産品である版画が一点制作の肉筆画に勝るというユニークな逆転現象が今日では起きている。それは浮世絵の本質が大衆芸術であり、町人の需要に対して大量生産が可能な版画が、まさに浮世絵の独自性を体現した表現様式であったからだ。しかし浮世絵師は版画とともに一点制作の肉筆画も精力的に制作しており、版画と肉筆画の二つの方向性はお互いに作用を与えて浮世絵の芸術性を発展させてきた。特に江戸時代中期の明和～寛政（1764～1803）は多色摺版画、いわゆる錦絵の隆盛により浮世絵芸術はひとつの黄金期を迎え、版画、肉筆ともに質の高い優れた作品が数多く生み出された注目すべき時代である。錦絵の発展とともに浮世絵の主流は次第に版画へと移っていくが、その転換期にあつて肉筆画による数多くの傑作を遺した浮世絵師として、第一に勝川春章（1726～1792、以下春章）の名前が挙げられる。江戸時代中期に活躍した数多い浮世絵師の中でも、版画と肉筆画の両面で活躍した春章は希有な存在である。

研究作品のMOA美術館本は重要文化財の指定を受けており、春章の代表作であるとともに肉筆画の第一級の名品として殊に高い評価がなされてきた。十二ヶ月の月次風俗の画題を美人画として置き換えたもので、柱絵を意識した縦長の画面にそれぞれの月の風俗が巧みに構成されており、描写の細やかさにおい

ては他の作品の追随を許さないものとなっている。古来、肥前平戸藩主松浦家に伝来したと伝えるもので、戦前中野忠太郎氏の有に帰し、戦後になって静岡の熱海美術館（現MOA美術館）の所蔵となり現在に至っている。風俗十二ヶ月図という作品名の通り本来は十二図の揃いものであったはずであるが、早い段階で一月と三月の二図が失われたと考えられ、後年に補作された歌川国芳（以下国芳）による三月の図に該当する「潮干狩」を含めると十一幅が現存している。この一月と三月の図を欠いた経緯については不明な点が多く、古くから未完説が取り上げられることもあるが、十二ヶ月のそれぞれに付属した聯歌全十二幅が現存しており、その存在を考慮すれば当初は十二図の揃いものであったことは確かである。また作品の形状は現在十一図（国芳の補作を含む）全て掛軸装となっているが、過去の表装形態は六曲一双の屏風であったという文献の記述が確認できる。また、その屏風は自由に絵を取り外すことのできるきわめて特殊なつくりのものであった可能性も指摘されている。

以上、図の欠失と表装形態の変更についてはMOA美術館本の論点として先行研究で述べられてきたものである。失われた一月の図様はこれまで全く不明であったが、本研究ではこれまで言及されることのなかった春章門弟の勝川春潮の版画作品「風俗十二候」とMOA美術館本の関連性を検証し、春潮が春章の図様を転用している可能性が高いことを明らかにした。また三月の図は国芳の補作である「潮干狩」と書聯の関係性について再考を行った。それらの指摘を基に、実際に失われた一月と三月の復元図を制作した。それらに先行して現存する十図の想定復元模写を制作したことで、版画と肉筆での表現の違い、春章と春潮または国芳との作家性の違いを実技的な見地から明示し、一月と三月の図をより高い精度で想定復元することができたと考える。屏風装への鑑賞形態の再現については、掛軸装になる前の写真資料を発見し、文献の記述の裏付けを取ることができた。絵を取り外せるという特殊な構造に関しては、同じ江戸時代のけんどん式屏風を調査、参考にし、制作した。屏風装になることで全体の有機的なつながりを見せることができ、尚かつ取り外すことで、個々の絵画として独立して鑑賞できるという特殊な趣向の一例を示すことができた。

MOA美術館本の作品としての芸術的価値は今日において定まったものであるが、勝川春潮の「風俗十二候」の存在は、その失われた図像を伝えるだけでなく、師匠と弟子、肉筆画と版画の相関性を新たに提示することができた。また屏風装は十二月図の源流である大和絵の月次絵において基本的な鑑賞形態であり、雅と俗が両立する春章作品の中で、MOA美術館本がその芸術性を最も体現した作品であるという評価を付け加えることができると考える。

（論文審査結果の要旨）

本論文は、「肉筆浮世絵に関する研究」であるが、就中、MOA美術館所蔵の重要文化財「婦女風俗十二ヶ月図」勝川春章（1726-93通説、新説は17歳若い）筆の想定復元模写について、その制作工程を詳述したものである。特に「婦女風俗十二ヶ月図」のうち欠本となっている一月と三月の想定復元は説得性のある論述となっており、さらに現在、掛幅装になっている「婦女風俗十二ヶ月図」を原本の屏風装に、しかも取り外しが自由にできる椽細の六曲屏風一双の形状に戻したことは、江戸時代における屏風装の浮世絵を鑑賞できる形体を目で見える形に復元したことは高く評価される。

本論文は、冒頭の「はじめ」と終りの「結論」を挟んで四章、十節、二十三項目（ここでは省略）を立て構成される。すなわち、第一章・肉筆浮世絵と勝川春章 第一節・肉筆浮世絵について 第二節・勝川春章について 第二章・「婦女風俗十二ヶ月図」の位相 第一節・研究作品について 第二節・先行研究による指摘 第三章・一月、三月の図の検討 第一節・一月の図について 第二節・三月の図について 第四章・想定復元模写制作 第一節・熟覧調査 第二節・下図制作 第三節・本画制作 第四節・鑑賞形態の復元 である。

まず、一月の欠本については、絵に附属する書聯の意味する「正月の朝を迎えるお目出たい情景」と弟子の春潮が師の春章の風俗図を転用して描いていることから、春潮の「風俗十二候一月」（永寿堂版・チェスタービューティ図書館、大英博物館蔵）を反転して復元模写したことは新知見である。

また、三月の欠本については、春潮の「潮干狩り図」（版画）はじめ肉筆の歌川豊春の「汐干狩り」、川

又常正「美人十二ヶ月 三月」及び歌川国芳の補作「潮干狩」の浮世絵を参考にしながら、春章の没後の書聯であるが、波が引いた早朝の情景を内容としているところから、春章による三月の画題は「潮干狩」であったと考えるのが自然とし想定復元を行っている。

表装形態については、昭和8年（1933）に発行された『孚水ぶんこ第7号勝川春章記念号』（孚水画房）に著名な浮世絵研究家が、中野忠太郎氏所蔵の掛幅に改装された「婦女風俗十二ヶ月図」を見た感想が掲載されている。その一つに「この無意味な掛幅装を廃して、六曲一双の椽細折屏風に仕立てすべきである」（洪井清）「旧肥前平戸藩主伯爵松浦厚氏の家宝であって、初めてこの十幅は六枚折屏風一双に作られて、自由に画をばさし込み眺められるやうにして所蔵されてみたものであろう」（島田筑波）。浮世絵研究家諸氏の述懐にあるように、論者が「けんどん式」の自由に取り外しのできる屏風装に復元したことは浮世絵鑑賞史の上でも画期的なことといえよう。

論文は、想定復元の制作過程を評述し、もっとも妥当なところであるが、復元制作作品としても欠本である1月と3月図が他の図様のみならず彩色の調和を計って賦彩された技倆も高く評価される。また「婦女風俗十二ヶ月図」の婦女子は庶民の風俗でなく上流富裕の婦女として描かれ、着物の文様の多彩細緻な描写も論者が説く雅俗の両者をあわせもつ春章の優れた肉筆を再現したこともあわせて高く評価される。

（作品審査結果の要旨）

向井大祐さんの研究は、MOA美術館蔵重要文化財「婦女風俗十二ヶ月図」勝川春章筆を対象とした肉筆浮世絵の研究である。浮世絵は、木版画として広く知られているが、絵師、摺師、版元の合作による木版画に対して、絵師が筆と絵具で描いた肉筆画の研究からは絵師自身の制作意図や力量を明らかにすることができる。

「婦女風俗十二ヶ月図」は、制作当初には12点の連作として描かれたものであったが、現在は1月と3月を欠いた10点の掛軸となっている。向井さんが取り組んだのは、現存する10点の模写に欠落した1月と3月の想定復元模写を加えた12点すべての復元模写である。

向井さんは、おもに春章の弟子である勝川春潮の作品を参照しながら1月と3月の構図を想定復元したが、その際、書聯や季題、周辺作品との関係などについても十分な考証を重ねて構図を決定している。また、向井さんは修士課程において東京藝術大学蔵「竹林七姪図」勝川春章筆の現状模写を行っており、春章画の技法や材料についての体験的な研究を蓄積していた。その経験と研究の上に「婦女十二ヶ月図」の熟覧調査を行ったことは、本研究における想定復元模写を高いレベルで実現することにつながっている。

完成した「婦女十二ヶ月図」の想定復元模写は、浮世絵師の中でも特に画技に長じた絵師として知られる勝川春章の技量と画品を窺わせるに足るものであり、想定復元でありながら高い鑑賞性をもった模写作品となった。特に、失われてしまった1月と3月の図を実体として提示できたことに加え、12か月の連作としての視覚体験を提供できたことは大きな成果である。さらに、向井さんは想定復元した12点の模写を六曲一双の屏風装に仕立てた。これは、同作品がかつて屏風装であったという記述を根拠とするが、取り外し可能なけんどん式という非常に珍しい屏風装を復元した点も、豊かな江戸時代の文化に迫る研究の一環として評価したい。

以上のように、向井さんの提出した想定復元模写は、学術的な根拠に基づいた復元図であること、時代の技法や絵師の技量を十分なレベルで再現した原本の芸術性を損ねることのない復元図であることから、本学の博士に相当するものと判断した。

（総合審査結果の要旨）

本博士論文は、文化財保存修復の論文としては画期的な第一歩を踏み出したもので、今後の指標として評価されるものである。過去にも数人の先輩たちにより、現在ではオリジナルの存在が確認されていない作品を、類例資料の研究と作家としての実技経験から導き出すという研究は行われてきたが、今回の研究

は非常に難易度が高かったにも関わらず、説得力のある成果を上げた。

このような研究は模写・研究・修復という三位一体の研究であり、それぞれの能力の質が大切になる。本研究は中でも群を抜く質の高さが最大の成果を上げている。消失してしまった欠損部の復元をし「婦女風俗十二ヶ月図」を再現したことにより、江戸時代の日本の芸術性の高さが実感でき、相反する雅俗の両立という点にまで言及することが可能になった。欠損した肉筆浮世絵の復元からこのような理論の証明に至った点は、独創的である。

研究内容について具体的に述べると、先ず修士課程に於いて勝川春章の肉筆浮世絵の現状模写を行い、その後「婦女風俗12ヶ月図」の内の現存する10図についても想定復元模写を行い、肉筆浮世絵並びに勝川春章についての特徴と魅力について学んできた。これらの実体験を生かして、欠損作品の復元を行う。1月の図柄については先行研究や高弟の一人春潮が転用したと見られる版画を参考にし、復元を行った。3月の図柄については歌川国芳の補作「潮干狩」を参考に、現存する他の場面との整合性を考慮して復元をした。参考資料と作家の持つ創作能力を融合させる事こそが、欠損作品を復元する上で大きな意味をもつ。線描の特徴や絵具の混色・配色等に至るまで想定する事は、現存が確認されていない作品において今まで不可能とされていた。それを克服する方法としては、ある程度の部分が作家の経験と感に頼らざるを得ないところにある。そこに積極的に挑戦し結果を残していった点は、今後このような研究の指標ができ意義がある事である。またこの復元模写が質の高い優れたものに仕上がっている点が、本研究の価値を上げている。この復元模写作品並びに研究が、先行研究として大いに役立つ事を期待したい。

文化財保存学の表装についても、鑑賞形態の復元として、江戸時代の知恵を生かした「けんどん式屏風」という、現在ではあまり見られなくなった表装の復元を行い、「婦女風俗十二ヶ月図」の元の姿を再現した事は意義がある事であると共に、2面が消失してしまった根拠についても実装してみせた。

本研究は今まで不可能と思われていた領域に積極的に一步踏み込んだ研究であり、文化財保存学の博士論文の質を大きく前進させた。今後このような研究領域が定着する事により、消失してしまった文化財の次世代への継承が可能になってくる意義は大きい。